

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 7 年 12 月 発 行

アン・サッカレー・リッチーの自覚と
フェアリー・テイル・フィクションの枠組み

矢 次 綾

アン・サッカレー・リッチーの自覚と フェアリー・テイル・フィクションの枠組み

矢 次 綾

1. 序

アン・イザベラ・サッカレー・リッチー (Anne Isabella Thackeray Ritchie, 1837-1919) は、作品が読まれることも批評されることも現在ではほとんどないが、ヴィクトリア朝中期の人気作家の一人であった。例えば、『エリザベスの物語』(*The Story of Elizabeth*, 1862-63), 『懐かしのケンジントン』(*Old Kensington*, 1872-73), 『断崖の村』(*The Village on the Cliff*, 1867)はジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-80) によって高く評価されている (Gérin 1630)。もっとも、キャリアの後半は、長短編の小説よりも、父サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の全集に収録されたものをはじめ、小説や作品集の序文を兼ねた、先輩作家の短い伝記や、過去に遭遇した芸術家たちに関する随想の執筆が主要な仕事だった。リッチーが現在、文学研究の遡上に上がるとすれば、ペローの「青髭」(*La Barbe Bleue*, 1697) を再話した「青髭の鍵」("Bluebeard's Keys") などのフェアリー・テイル・フィクションに関する場合がほとんどである¹⁾。しかも、リッチーの作家像やその作品を研究する一環としてというよりも、ザイプスがヴィクトリア朝のお伽話のアンソロジーの序文において、そのフェミニズム的要素について分析する際にリッチーの「シンデレラ」("Cinderella," 1866) について述べたように (Zipes xxxvi), 当時の文学の傾向について述べる際に言及される場合がほとんどである。デズモンド・マッカーシーが『サッカレーの娘——アン・サッカレー・リッチー回顧録』

(*Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*, 1952)の巻頭言で、自分は賛同しないと言いつつ引用している『人物事典』(*The Dictionary of National Biography*)の記述の通り、リッチーは「サッカレーの娘として幼い頃から文学、芸術、音楽における著名人と知り合い」であり、作家としてよりも「彼女の生きた時代の社会生活を代表する人物として注目に値する」と、20世紀以降、認識されている可能性が高い(MacCarthy 7)。ヴィクトリア女王が王位に就く約10日前に、ハイド・パークに隣接するアルビオン・ストリートで生まれたリッチーは、ヴィクトリア時代を生き抜き、『記憶の中の数章』(*Chapters from Some Memoirs*, 1894)に掲載されたものをはじめとした多くのエッセイに、サッカレーの娘だからこそ見聞することができた文化人たちの側面や、文化人同士の個人的な関わりを記しており、彼らの姿を後世に伝えるのに一役買っている。姪にあたるヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)が²⁾リッチーの死後間もない1919年3月6日付の『タイムズ・リタラリー・サプルメント』(*Times Literary Supplement*)に、エッセイ「レディ・リッチー」("Lady Ritchie")を寄稿し、リッチーを、「特に意識されていなくても、ヴィクトリア朝的なものとして人々の心に残っているものの源」と呼んだのも、ヴィクトリア朝の生き証人としてのリッチーの側面が印象的だからであろう。ただし、ウルフは、そのように述べる前段階として、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-55)やジョルジュ・サンド(Georgine Sand, a. k. a. Amandine-Aurore-Lucile Dupin, 1804-76)についてのリッチーの回想を引用するだけではなく、『エリザベスの物語』や『懐かしのケンジントン』について考察することを通して、リッチーの小説は吟味する価値があるという認識を表している。筆者はそれに賛同するが、本稿では、リッチーが主にお伽話を再話する際に用いた枠組みに着目しながら、彼女が父サッカレーの後継者としての自覚を持っていたことと、18世紀から19世紀にかけてのイギリスおよびフランスにおける女性たちが育んできた文学の伝統を引き継ぐ者としての自覚もまた持っていたことに着目したい。

2. ミス・ウィリアムソンとは誰か

お伽話は、例えばハイディ・アンヌ・ハイナーが『アン・イザベラ・サッカレー・リッチーのフェアリー・テイル・フィクション』(*The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie*)の序文の冒頭で述べている通り、主に女性が語り継いだと考えられる。フランスの文学サロンに集う女性たちは「自分たちの属する世界と、その世界が期待する女性のあり方を言い広めると同時に批判する物語を、語ったり語り直したりするために、伝統的な物語を利用」した。それを受けて、後続の女性作家たちは同時代の人々のために、お伽話を記録したり再話したりしてきた(Heiner 1)。リッチーもそのうちの一人だと考えられる。リッチーはそのような文学の伝統を継承する者としての自分の立場を明示するかのように、フランスの文学サロンを19世紀半ばのイギリス中産階級の居間に置き換え、そこに集う女性たちがお伽話を再話する様子も、作品に書き込んでいる。さらに、リッチーは彼女たちを通して自分が再話するお伽話の特徴を、第一話である「森の中の眠り姫」(“The Sleeping Beauty in the Wood,” 1866)の冒頭で次のように述べている。

[...] the stories are only histories of real living persons turned into fairy princes and princesses. Fairy stories are everywhere and every-day. We are all princes and princesses in disguise, or ogres or wicked dwarfs. All does not seem to change very much in a thousand years or so, and we don't get tired of the fairies because they are so true to it. (8)³⁾

以上の引用はH.と呼ばれる未亡人の発言の一部で、リッチーはミス・ウィリアムソン(Miss Mary Williamson)という老年期にさしかかったと考えられる独身女性と、その友人H.が、知り合いの若い女性について語った話という設定で、お伽話を再話しているのである⁴⁾。

語り手の一人に「ウィリアムの息子」を含意する“William-son”という名前を与えることによって、明らかにリッチーは、自分が「書く」という男の仕事を経父サッカーから引き継ぐ者だという自負を表現している。換言すれば、ミス・ウィリアムソンはリッチーのペルソナだと考えることができる。ウィリアムソンを独身女性と設定したのは、フェアリー・テイル・フィクションを執筆している段階で彼女が実際に独身だったからというよりも、独身女性を指す“spinster”という語には、物語を紡ぐ（spin）者という意味があるからであろう。リッチーは偉大な文人たちと交流について回想した『テニスン、ラスキン、ブラウニングについての記録』（*Records of Tennyson, Ruskin and Browning*, 1892）において、ブラウニング（Robert Browning, 1812-89）が、家庭で毛糸を紡いでいるローマの女性が彫刻された石碑を引き合いに出しながら、まだ十代のリッチーと妹のミニーに「あなたたちも将来、あなた方の毛糸を紡がなければなりませんね」（Ritchie, *Records* 202-3）と言ったエピソードを紹介している。次いでブラウニングは、妻のエリザベス（Elizabeth Barrett Browning, 1806-61）に「あらゆる女性は紡ぐべきある種類の毛糸を、または別の種類の毛糸を持っているのですよね」と問いかけたというのである。エリザベスが妻であり母であり、かつ詩人でもあることを考慮するなら、ブラウニングは糸を紡ぐという行為を、家庭を切り盛りするという意味だけではなく、物を語るという意味でも使用している。換言すれば、ブラウニングのこの言葉を引用しながら、リッチーは、書くことを仕事にする女性（spinster）もいるという認識を表明している。フェアリー・テイル・フィクションでは、語り手の一人であり、彼女のペルソナと解釈できる独身女性（spinster）を「ウィリアムの息子」という名前で呼んでいる。そうすることを通して、リッチーは、物を語ることは父から受け継いだ自分の仕事だという認識と、お伽話を再話するという女性が紡いできた文学の伝統を自分は受け継いでいるという認識の両方を、表明していると考えられる。

このようなペルソナをリッチーはいつ頃から設定していたのだろうか。リッ

チャーは十代の頃から、「駄文を書いて時間を無駄にせず、他の人が書いた本を読みなさい」(Fuller 87-88)という父に指示に従い、22歳のときに父から執筆許可が下りるまで「書くこと」をしていない。ただし短いお伽話は書いていたとリッチーは付け加えているが、それがその後出版されたフェアリー・テイル・フィクションとどの程度同じなのか、もしくは異なるのか、また、ミス・ウィリアムソンもしくは同様の役割をする自分のペルソナを既に創造していたかどうかは不明である。出版されたリッチー作品の中で、ミス・ウィリアムソンという人物が登場する最も早い例は、『エリザベスの物語』である。最終章(第12章)に、人間的に未熟なヒロインを温かく見守り救いの手を差し伸べる中年もしくは老年の独身女性、ミス・ダンピエ(Miss Dampier)の友人の独身女性メアリとして登場し、この小説の語り手が実はミス・ウィリアムソンだったことが明かされる(74)⁵⁾。ミス・ウィリアムソンは、フェアリー・テイル・フィクションだけではなく、『エリザベスの物語』に続く長編小説『断崖の村』や、『フルハムの小道』(Fulham Lane, 出版年不明)などの中短編小説でも、一人称の語り手の役割も担っている(Shankman 160)。1881年には、ミス・ウィリアムソンの語りによる短編小説を集めた単行本『ミス・ウィリアムソンの脱線話』(Miss Williamson's Divagations)が出版され、その中の一遍「フィナ——ミス・ウィリアムソンの古い日記の断片から」(“Fina. Some Passages from an Old Diary of Miss Williamson”)において、自分は家庭教師(governess)をしている「静かで、リスペクタブルで、自立した年配のレディ」(248)だと、その個人的な背景を自ら語っている⁶⁾。

ミス・ウィリアムソンは、フェアリー・テイル・フィクション以外の作品においても、未熟さを優しく見守りながら、身近な若い女性についての物語をする。すなわち、彼女は、作者のペルソナであるだけではなく、リッチー作品にしばしば登場する中年期以降の独身女性で、ヒロインを見守り、往々にして人生の指針を与える女性群の一人だと考えられる。そのような女性群の先駆けが、『エリザベスの物語』に登場するミス・ダンピエである。同様の役割を果

たす年長の女性であれば、リッチー作品に限らず、ヴィクトリア朝、もしくはヴィクトリア朝の雰囲気が残る中で成長した中産階級の若い女性を主人公とした小説に頻繁に登場する。例えば、リッチーが、自分の手本 (torch-bearer) として、マーガレット・オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97) と共に名前を挙げているエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の作品では、『従妹フィリス』 (*Cousin Phillis*, 1864) の召使ベティー (Betty) や、『妻たちと娘たち』 (*Wives and Daughters*, 1865) のヒロインの思慕の対象であるロジャー (Roger Hamley) の母親が、そのような役割を果たす。リッチーに後続する作家の作品では、『眺めのいい部屋』 (*A Room with a View*, 1908) のシャーロット (Charlotte Bartlett) をはじめ、ほとんどの E・M・フォースター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) 作品に、世慣れないヒロインの付き添い役 (chaperon) として登場する女性たちがそうだと言える。以上に挙げたギヤスケルやフォースターの作品の場合と、リッチー作品の場合とで違いがあるとすれば、リッチー作品に登場するミス・ウィリアムソンをはじめとした独身女性たちが、経済的に自立し、精神的に自己完結した女性たちであり、ヒロインやその周囲の人々の抱えているような悩みや苦痛を超越しているように見える点である。40歳のときに17歳年下のリッチモンド (Sir Richmond Ritchie, 1854-1912) と結婚するまで独身だったリッチーが、自分の将来あるべき姿としてそのような女性たちを創造したかどうか、また、ミス・ウィリアムソンやその友人 H. を描きながら、独身者と未亡人というヴィクトリア朝社会の周辺に位置する女性の生き方についてどの程度考察していたかどうかについては想像の域を出ない。それでも、リッチー作品の特徴の一つとして、彼女たちが果たす役割は検討するに値する。この点については、別の機会を設けたい。

ミス・ウィリアムソンという名前から、父の意思を継ぐ者というリッチーの自負が読み取れることについては既に述べたが、娘が後継者になるよう、サッカレーが誘導したと推測できる。サッカレーは1846年、9歳のリッチーの才能を認めて、「私は娘が天分のある男になるのではないかと心配しています。

気立てがよく愛情深い女性になってもらいたいのすけどね」(Fuller 30)と、義理の姉もしくは妹にあたるジェイン (Jane Shawe) への書簡に記しているが、リッチーが14歳になると自分の筆記者としての役割を娘に託し、その著作を誰よりも先に読む資格を与えている (MacKay 57)。そうすることを通して、彼は作家の仕事を娘に教授しようとしたのであろう。「駄文を書いて時間を無駄にせず、他の人が書いた本を読みなさい」と娘に指示したのも、娘を文筆家に育てるための一環だったと解釈できる (Fuller 87-88)。このように娘に下積みをさせている間、サッカレーは、例えば1856年の書簡の中で、「絵画教師が何と言おうと、娘は絵がとても上手で、彼女の年齢のときの私よりもずっとうまいです。文章についても同様です」(Shankman, “Introduction: 1852-1858” 35)と述べ、19歳のリッチーへの期待を表現している。リッチーが22歳になると、サッカレーは「お前にとって格好の題材が見つかったぞ」と言って娘に執筆を再開させ、発表の場として彼自身が主催する『コーンヒル誌』(*The Cornhill Magazine*)を提供する。そしてリッチーは、1860年に、スピタルフィールズのスラム街の子供たちの教育について執筆したエッセイ「小さな学習者たち」(“Little Scholars”)を、その翌年には、生活難に喘ぐ人々について執筆したエッセイ「困窮者と独身者」(“Toilers and Spinsters”)を『コーンヒル誌』に発表するのである⁷⁾。以上のエッセイは、同誌に掲載されたその他のエッセイなどと同様に匿名で掲載されたため、サッカレーは友人たちに、「『コーンヒル誌』の5月号を読んで欲しい。うちのぼちゃぼちゃのアニーの『小さな学習者たち』が載っているから」と、書簡で知らせている。次いでリッチーは、1862年9月から翌年の1月にかけて、長編小説『エリザベスの物語』を同誌に連載して好評を博し、文筆家として着実に歩を進めていく。敬愛するオースティン (Jane Austen, 1775-1817) をはじめとした先行する女流作家の作品について書いた「ヒロインとその祖母たち」(“The Heroines and Their Grandmothers,” 1865)を経て、ミス・ウィリアムソンとH. が語ったものという設定でお伽話を再話した「シンデレラ」(“Cinderella”) および「森の中の眠り姫」が『コーンヒル

誌』に掲載されたのは、1866年である。

リッチーから見れば、サッカレーは意識的もしくは無意識的にその手法に倣う師であった。作者のペルソナが物語するという手法は、サッカレーが⁸⁾、例えば『パリ・スケッチブック』(*Paris Sketch Book*, 1840)で、架空の人物サミュエル・ティトマーシュ (Samuel Titomashe) の視点を通して用いたものであり、この手法に影響を受けて、リッチーは、フェアリー・テイル・フィクションを語る際に、ミス・ウィリアムソンという自分のペルソナを語り手として設定していると推測される。リッチーがサッカレーの『バラと指輪』(*The Rose and the Ring*, 1854)に登場する妖精ブラックスティック (Blackstick) を、父のもう一人の分身と見なすことによって、童話作家としての父に敬意を払っていると考えられることもまた可能であろう。リッチーは1908年に出版した随想集を『ブラックスティック・ペーパーズ』(*Blackstick Papers*)と呼び、画家ヘイドン (Benjamin Haydon, 1786-1846) についての随想を兼ねた序章 (“Introduction – Haydon”) において、この随想集を『ブラックスティック・ペーパーズ』と呼ぶ理由は、ブラックスティックが好むであろう「古い本、若い人たち、実践的な教育を行う学校、指輪、バラ、センチメンタルなこと」(1) について書いた随想を収録しているためだと説明しながら、父のことを回想している⁹⁾。さらに、例えば、女子教育について考察した「ブライトンのエーゲリア」 (“*Egeria in Brighton*”) や「セント・アンドルーズ」 (“*St. Andrews*”) では、彼女自身が推奨している女子の高等教育を、ブラックスティックが好むこととして述べながら、自分と父の絆を表現している。リッチーは、ブラックスティックとその仲間が、P. M. と A. M. とそれぞれ名前を変えてパリを旅する様子を描いた「パリ——プリズムと古いもの」 (“*Paris – Prisms and Primitifs*”) をこの随想集に収録することを通して、『パリ・スケッチブック』のオマージュを創造していると解釈することもできよう。

ただし、その意に従うことを求め続けた家父長サッカレーは、利発なリッチーにとって重荷だった可能性も否定できない。リッチーは父が決めた通りに作

家として着実に歩き始めることで父の期待に応える一方で、意識的もしくは無意識的な怒りもまた父に対して抱き、シャンクマンが指摘するように、1863年のクリスマス・イブにサッカレーが急死したとき、悲しみに打ちひしがれるのと同時に、父の支配から解放されたと考えられる（“Introduction: 1859-1863” Shankman 117）。以上の点について証明するのは難しいが、リッチーには、支配的な父だけではなく、ロール・モデルとして、よき指導者として——ミス・ウィリアムソンをはじめとした年長の女性たちが、リッチーのヒロインたちにとってそうであったように——導いてくれる女性たちもいたことは確かだと言えそうである。この点について次章で吟味したい。

3. 女性のサークル

リッチーには、女性が紡いできた文学の伝統を引き継いでいるという自負もあった。フランスのサロンでの文学談義を、19世紀イギリスの中産階級の居間におけるミス・ウィリアムソンとH.のお喋りに置き換えて、フェアリー・テイル・フィクションを創造したことは、その証拠の一つである。お伽話を再話するという点でリッチーに影響を与えた女性として、フランスの童話作家、ドーノワ伯爵夫人（Marie-Catherine d’Aulnoy, 1650/51-1705）を挙げることができる。リッチーは、ドーノワ夫人の「白猫」（“Le Chatte Blanche,” *Contes Nouveaux ou Les Fées à la Mode* [1698]）を再話し、さらに、彼女の童話集の新たな英訳（*The Fairy Tales of Madame D’Aulnoy*, 出版年不明）が出版されたときに、ドーノワ夫人小伝とも言える序文を執筆している。リッチーが敬愛した、その他のフランスの女性作家として、既に言及したジョルジュ・サンドに加え、17世紀の書簡作家セヴィニエ侯爵夫人（Marie de Rabutin-Chantal, marquise de Sévigné, 1626-96）や、スタール夫人（Anne-Louise Germaine de Staël, 1766-1817）がいる。前者について、リッチーはオリファントの依頼で『ブラックウッド海外古典集』（*Foreign Classics for English Readers*, 1877-90）に掲載するための評伝を書き、1881年には伝記（*Madame de Sévigné*）を単行本とし

て出版している。スタール夫人について付け加えるなら、リッチーはその肖像画をお気に入りの本を入れた本棚の上に飾っていた (Fuller 176)。

娘のフラー (Hester Ritchie Fuller) が述べている通り、リッチーがフランスの17世紀および18世紀の回想録や伝記を好んだ背景として、子供時代の大半をパリで過ごしたことが挙げられるだろう。リッチーは3歳になる1840年から1846年にかけて、そして、父がアメリカに講演旅行に出かけるなど長期間家を空けた1852年と1855年に、パリ在住の祖母、すなわちサッカレーの実母カーマイケル=スミス夫人 (Mrs Carmichael-Smyth, a. k. a Anne Becher Thackeray, 1792-1864) とその再婚相手に、妹ミニーと共に預けられた。その理由は、実母のイザベラ (Isabella Gethin Shaw Thackeray, 1816-93) が知的障がい者であり、母親としての役割を果たすことは困難だと診断されていたからである。イザベラは精神錯乱から3歳のリッチーを海で溺死させかけ、以降、77歳で死亡するまで家族と別居し、医師や介護人に預けられていた (Shankman, "Introduction: 1840-1851" 3)。もっとも、祖母の家は、リッチーにとって居心地がいいものではなかったようだ。というのは、ジェランの言葉を借りるならば、サッカレーが、エッジワース (Maria Edgeworth, 1768-1849) の提唱したような「無味乾燥な教育方法」(the "matter-of-fact" system of education) を嫌い、リッチーを想像力豊かな娘に育て上げようとしたのとは異なり、カーマイケル=スミス夫人は厳格な教育を施して、孫たちを「小さなカルヴィニスト」にしようとしたからである (Gérin 15)。そのため、リッチーは祖母に強い反発心を抱くようになったとジェイは指摘している (Jay 199)。それを傍証するかのように、18歳のリッチーは1855年のパリ滞在において、祖母と同居することを拒み、祖母宅に隣接するフラットにミニーと、シャベロンとして同行していたガヴァネス、エイミー・クロウ (Amy Crowe) と共に滞在している (Shankman, "Introduction: 1852-1858" 31)。リッチーがカルヴィニズムを嫌悪した証拠として、例えば、『エリザベスの物語』において、実在のカルヴィニストの牧師アドルフ・モノ (Adolphe Monod, 1802-56) をモデルに、薄情で利己的な

トゥルヌール牧師 (Pasteur Tourneur) を創造したことが挙げられる (Jay 200)。そのような孫リッチーに、カーマイケル＝スミス夫人が手を焼いていた証拠として、息子に対する書簡の中で、彼女がリッチーを「不信心な頑固者」(a stiff heart of unbelief) と呼び、あの子は「旧約聖書なんて大嫌いだし、新約聖書なんてただの歴史だって宣言したのよ」と、嘆いていることが挙げられる (Shankman 30)。

それでも、パリにおける祖母との生活がリッチーに好影響をもたらしたと考えられるのは、リッチーが『記憶の中の数章』(*Chapters from some Memoirs*, 1894) に収めた数編の随想に記しているように、祖母を介して様々な文化人に遭遇しているためである。例えば、リッチーは、有名な奴隷制度廃止論者のチャプマン夫人 (Maria Weston Chapman, 1806-85) に会い (“My Poet” 9)⁹⁾、死を目前にしたショパン (Frédéric François Chopin, 1810?-49) がピアノを弾くのを聴いている (“My Musician” 26-27)。その中で最も重要なのは、エリザベス・バレット・ブラウニングとの出会いであろう。執筆年代がはっきりしないが、リッチーはバレット・ブラウニングについての「古い日記の中の少女っぽいメモ」を、1892年に出版した『テニスン、ラスキン、ブラウニングについての記録』の中で引用している。

I think Mrs. Browning is the greatest woman I ever saw in all my life. She is very small, she is brown, with dark eyes and dead brown hair ; she has white teeth, and a low, curious voice ; she has a manner full of charm and kindness ; she rarely laughs, but is always cheerful and smiling ; her eyes are very bright. (*Records* 190 ; Fuller 86)

パリで出会った後、1853年から翌年にかけてサッカレーも一緒に滞在したローマでも、15歳のリッチーと13歳のミニーはバレット・ブラウニングと親しく交流した (*Records* 192-93)。リッチーは『テニスン、ラスキン、ブラウニ

ングについての記録』の別の箇所では、バレット・ブラウニングを「母親的な」(motherly, 160)と形容しており、彼女を母親であるかのように慕っていたと推測される。マッケイは、バレット・ブラウニングを、写真家のジュリア・マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-79)、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-81) の妻ジェイン (Jane Welsh Carlyle, 1801-66) と共に、リッチーの代母的な役割を果たした女性として挙げ、リッチーが自分の人生について探求していく上での彼女たちの影響力について論じている。

シャンクマンが指摘しているように、リッチーには、年齢や性別、社会的地位にかかわらず友人として対等であろうとする傾向がある。彼女はバレット・ブラウニングが「母親的」であるだけではなく、「描写しがたく忘れたい関心と平等と理解」も持ち合わせていたと記し、サッカレーの友人で、彼女から見れば母親と言ってよい年齢のファンショー夫人 (Mrs. Farnshawe) に、1855年6月頃の手紙で「ああ、自分が男だったらいいのに。私は職業を持ちたくて仕方がないのです。編み物をしたり繕い物をしたり、ただ小説を読んだりなんてしたくないのです」と、将来に関する本音を率直に語っている (Shankman, "Introduction: 1852-1858" 32)。このように、リッチーは年上の女性であっても、仲間意識もしくはそれに近い感情を持つことがある。その背景に、バレット・ブラウニングらとの出会いを通して、父を中心としたそれとは異なる、女性の文学サークルに実際に入りし、自分はその一員であり、そこで会う人々に仲間意識を持つようになったことがあると推測される。

リッチーが文学サロンで誰とどのように遭遇したかについては、様々な証言がある。例えば、ジェイは次のように述べている。

Taking tea in the Elizabeth Barrett Browning's salon gave Anny access to the 'tea parties' which the female authors, so despised by her father, had managed to parlay into a saleable commodity, while visiting the theatre with Mrs Sartoris, complete with George Sand in the audience [...]. (Jay 199)

オペラ歌手のサルトリス夫人 (Adelaide Kemble, 1815-79) は、リッチーが後に小伝的なエッセイを書くことになる人物であり (*Recollections* 193-95)、彼女と共に訪れた劇場でジョルジュ・サンドに遭遇したときのことについては、リッチーが残したメモを基にして、フラーが次のように記している。

[...] while the play was acting [Mrs. Sartoris] said: "Look" and there in a box a lady with coal black hair and a hard red face and a light black silk dress and a cameo brooch. "That is George Sand, my child," said Mrs. Sartoris. I was very glad to have seen her once tho' I did not think she looked very nice or at all like her beautiful thoughts. (Fuller 86)

ジョルジュ・サンドは作家としてリッチーを刺激しただけではなく、リッチーがエッセイ ("George Sand") に記している通り、女性の生き方や老いについて考察するきっかけを与えてもいる。要するに、十代の終わりまでの多感な時期にパリの文学サロンに出入りしたことを通して、リッチーは文筆家になるための様々な刺激を受けたと考えられる。パリのサロン主催者として名高いマダム・モール (Mary Elizabeth Möhl, a. k. a. Mary Elizabeth Clarke, 1793-1883) のサロンにも、リッチーは出入りしていた。1875年のレズリー・スティーヴンへの書簡によると、リッチーとミニーはマダム・モールのサロンで、19世紀のフェミニストとして名高いボディション (Barbara Leigh Bodishon, 1827-1891)、さらに歴史家のルナン (Ernest Renan, 1823-92) にも出会っている。この時のことを、ガーネットはリッチーの伝記において、リッチーが「マダム・モールとは何年も知り合いだったが、この非凡な女性にリッチーが慣れ親しむことはなかった」と述べ、さらに次のように叙述している。

[Now] nearly eighty, [Madame Möhl] looked like a cross between a Skye terrier and a cut-glass scent bottle, and had such a genius for cultivating people

that over the last sixty years and more, most of the leading lights of Europe had gathered in her salon. That evening, Anny found Madame Möhl and the feminist campaigner and landscape painter, Barbara Bodichon, and a circle of guest sitting round a historian Renan, “a little round flapping sort of man who talked most beautifully.” (Garnett 180)

オメアラはリッチーが、ヴィクトリア女王の四男、オールバニ公 (Leopold George Duncan Albert, 1853-85) に語った思い出話として、マダム・モールが「自分は年寄りだから」と言って、当時の女性がしていたような片足を引いてする挨拶をしなかった件や、まるで年老いた妖精であるかのように炉棚に座っていた件などを紹介している (O'Meara 201-3)。マダム・モールにどのような印象を抱いたとしても、リッチーが文化はどのように継承されているかを実際に見聞したのは確かだと言えよう。

以上のような場のあり方を自分なりに消化し、結実させたのが、彼女のフェアリー・テイル・フィクションの外枠だと考えられる。彼女のペルソナであるミス・ウィリアムソンとその友人の H. が現実存在する話としてお伽話の再話をするという構造は、既に述べたように、パリのサロンを 19 世紀イギリスの中産階級の居間に置き換えたものである。彼女たちの語る物語のヒロインが知り合いの若い女性であり、彼女たちがヒロインたちに温かい眼差しを注いでいることも考慮するならば、それは、文学や芸術と一般に見なされるものだけでなく、古い世代から新しい世代へと、女性同士の関わりの中で、女性の文化が脈々と受け継がれていることを表していると考えられることもできよう。

4. 結 び

リッチーは「駄文を書いて時間を無駄にせず、他の人が書いた本を読みなさい」という父サッカレーの指示に従っていた時期も、短いお伽話は書いていた (Fuller 88-87)。おそらくリッチーにとってお伽話を再話することは、敢えて

「書く」というほどでもない、日常的で自然発生的な行為だったのであろう。そのような行為として作り上げたフェアリー・テイル・フィクションに被せた、ミス・ウィリアムソンとその友人 H. のお喋りという枠組みも、リッチーの日常を反映させたものだと考えることができよう。以上の点を考慮するならば、ミス・ウィリアムソンと H. は、中年になったリッチーとミニーであるという推測は説得力がある¹⁰⁾ すなわち、フェアリー・テイル・フィクションの枠組みの中に、「書く」という父サッカレーの仕事を引き継いでいるというリッチーの自負や、女性たちが紡いできた文学の伝統を自分は継承しているという自覚も読み取ることができるが、それに加えて、物語をすることが日常的な行為である、彼女の置かれた環境を読み取ることもできる。

本稿では以上の点について吟味したが、リッチーのフェアリー・テイル・フィクションには、その枠組み以外にも吟味すべき点がある。例えばザイプスが「シンデレラ」を引き合いに出しながら指摘したフェミニズムとの関わり (Zipes xxvi) はそのうちの一つだが、この点については、場をあらためて、そして、フェアリー・テイル・フィクションに分類されない小説と合わせて検討したい。本稿の中で言及した、ミス・ウィリアムソンの同胞たち、すなわち、未熟なヒロインを見守り、必要に応じて人生についての指針を与える、中年期以上の独身女性についても同様である。

注

- 1) フェアリー・テイル・フィクションという用語は、Heidi Anne Heiner が2010年にリッチーが再話したお伽話を編集した *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (SurLaLune Press, 2010) のタイトルにおける用語に倣っている。
- 2) ウルフの父レズリー・ステイーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、リッチーの妹ミニー (Harriet Marian Thackeray, 1840-75) の夫であり、ウルフの母ジュリア (Julia Prinsep Duckworth, née Jackson, 1846-95) は、ミニーの死後にステイーヴンが再婚した相手である。ウルフはリッチーを「アニー伯母さん (Aunt Anny)」と呼んで慕っていた。『夜と昼』 (*Night and Day*, 1919) の主要人物で、有名詩人の孫娘キャサリン・ヒルベリー (Katherine Hilbery) は、ウルフがリッチーをモデルにして造形したと考えられる。

- 3) リッチーが再話したお伽話はすべて、*The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie* (ed. Heidi Anne Heiner, place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010) に依拠している。
- 4) Mourão は “Negotiating Victorian Feminism” の中で、ミス・ウィリアムソンと H. の関係について検討し、Jenny Huie が彼女たちは中年になったリッチーとミニーとして造形されていると指摘していることに触れ、H. は Miss Williamson の義理の姉もしくは妹と想定されると考えている (66)。さらに、Mourão は、ミス・ウィリアムソンが一人称と語り手と、三人称の語り手の中間に位置し、Audrey Jaffe が “semi-omniscience” と呼ぶ立場にあると述べている。
- 5) 『エリザベスの物語』からの引用は、*The Story of Elizabeth and Other Tales and Sketches* (Boston: Fields, Osgood, 1869) に依拠している。
- 6) 『ミス・ウィリアムソンの脱線話』からの引用は、*Miss Williamson's Divagations* (London: Smith, Elder, 1882) に依拠している。なお、Mourão によると、未出版の短編 “The House by the River” において、ミス・ウィリアムソンは事務員 (financial secretary) として病院に勤務している (74, n 18)。
- 7) 1874 年に出版された *Toilers and Spinners And Other Essays* に掲載された「困窮者と独身者」は、文法の誤りなどを加筆修正した改訂版である。この点についてシャンクマンは、“Additions occur in the explanation of advances that had taken place in the realm of women's work opportunities and facilities, for example, the establishment in 1873 of the Berners Street Club for women” (Shankman 167) と述べている。
- 8) 『ブラックスティック・ペーパーズ』からの引用は、*Blackstick Papers* (London: Smith, Elder, 1908) に依拠している。シャンクマンはこの作品集について、“Ramblings into the past, these articles are filled, nevertheless, with vitality, humor, and insights. Named for Thackeray's good fairy in *The Rose and the Ring*, *Blackstick Papers* contains, as Anny explains, “certain things in which she was interested—old books, young people, schools of practical instruction, rings, roses, sentimental affairs, etc., etc.” Anny discusses the education and condition of women, poets, musicians, writers, Paris in spring, and a scene that caught her eye” (Shankman, “Introduction: 1901-1919” 262) と述べている。
- 9) “My Poet” など、『記憶の中の数章』に掲載されているエッセイからの引用は、*Chapters from some Memoirs* (London: Macmillan, 1894) に依拠している。
- 10) 注 4) を参照。

引用文献

- Fuller, Hester Thackeray and Violet Hammersley ed. *Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*. Dublin: Euphorion, 1952.
- Garnett, Henrietta. *Anny: A Life of Anne Thackeray Ritchie*. 2004; London: Pimlico, 2006.

- Gérin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1981.
- Heiner, Heidi Anne. "Introduction." *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie*. place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010.
- Jay, Elizabeth. "'In her Father's Steps She Trod': Anne Thackeray Ritchie Imagining Paris." *The Yearbook of English Studies*. Vol. 36. No. 2 (2006): 197-211.
- MacCarthy, Desmond. "Forward." *Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*. ed. Hester Thackeray Fuller and Violet Hammersley. Dublin: Euphorion, 1952.
- MacKay, Carol Hanbery *Creative Negativity: Four Victorian Exemplars of the Female Quest*. Stanford: Stanford UP, 2001.
- Mourão, Manuela. "Negotiating Victorian Feminism: Anne Thackeray Ritchie's Short Fiction." *Tulsa Studies in Women's Literature*. Vol. 20; Part 1 (2001): 57-76.
- O'Meara, Kathleen. *Madame Möhl: her Salon and her Friends*. Cambridge: John Wilson and Son, 1885.
- Ritchie, Anne Thackeray. *Blackstick Papers*. London: Smith, Elder, 1908.
- . *Chapters from some Memoirs*. London: Macmillan, 1894.
- . *The Fairy Tale Fiction of Anne Isabella Thackeray Ritchie*. ed. Heidi Anne Heiner. place of publication unknown: SurLaMoon Press, 2010.
- . *Miss Williamson's Divagations*. 1881; London: Smith, Elder, 1882.
- . *Records of Tennyson, Ruskin and Browning*. London: Macmillan, 1892.
- . *The Story of Elizabeth and Other Tales and Sketches*. Boston: Fields, Osgood, 1869.
- . "Fina. Some Passages from an Old Diary of Miss Williamson," *Miss Williamson's Divagations*. 1881; London: Smith, Elder, 1882.
- Shankman, Lillian F. "Introduction: 1840-1851." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 1-10.
- . "Introduction: 1852-1858." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 27-36.
- . "Introduction: 1859-1863." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 98-118.
- . "Introduction: 1901-1919." *Anne Thackeray Ritchie Journals and Letters*. Columbus, Ohio State UP, 1994. 258-271.
- Woolf, Virginia. "Lady Ritchie." *The Times Literary Supplement* (6 March 1919): 123.
- Zipes, Jack. "Introduction." *Victorian Fairy Tales: The Revolt of the Fairies and Elves*. New York: Methuen, 1987.